

房のプロジェクトをやっていました。仕事の流れが通り分かれればまだペース配分もできるんですけど、本当に何も分からないので常に全力疾走という感じでしたね。」

彼が考える設計、建築とは何なのか……。「人に何かを与えられる建築をつくりたい」と彼はいう。この考え方は妹島氏と過ごした10年の間に学んだ、「与件ありき」という姿勢に裏打ちされている。

「すごく基本的な当然なことだと思わなくて、使う側と作る側の両方が満足しなければやっぱり意味がないと思うんですけど、建築は社会的なものだという意識があるので「こんなのが格好いいだろう」とかそういうイメージだけでは、建築の存在として絶対成立しないと思うんですね。僕が勤め始めた頃は、事務所も徐々に公共建築の仕事が増えてきた時期だったんです。公共建築というのはかわる人がすごくたくさんいて、特に美術館なんかは街のシンボリックなものです。ただ、公共建築に対して、一般の人はあまりどうとも思っていないと思うんですね。例えば市役所は、公共建築といっても別に何の印象もなく、単に市役所としての機能だけがある場所というか、でも公共建築というのは、やっぱり僕としては何か還元したいというか、何か新しい価値観だとか世界観だとか、プラスαを与えたいというふうに思うんです。だから、格好いいとか悪いとか、そういう単純な話ではないと思うんですね。建築家に依頼されたからといって好き勝手にやればいい訳ではなく、クライアントから与えられた条件を満たすのは基本で、その辺りを奔放にやるわけではないんです。与件は満たした上で、新たな価値観、世界観を提案することが出来るか？ということだと思わのです。

妹島さん、西沢さんは与件に対してとても忠実で、その姿勢はとても勉強になりました。実際どうなのか？ということが僕にはとても重要なので、実際に使ってみて心地よいか、何か発見があるとか、普通に使う以上の何かを与えられる建築をつくっていきたくて考えていますね。」

金沢21世紀美術館プロジェクトには5、6年かかった。設計中は東京で作業をして、打合せの度に金沢へ行っていた。現場の工事は約2年半。この段階になると金沢に滞在することが多くなり、自然と金沢の知り合いも増えた。いろいろな人と話をする中で気付いたことは、このプロジェクトに興味のない人の方が多いということ。

「美術関係者が期待をよせてくれているのとは裏腹に、一般の人は美術館建設のこともあまりよく知らない人が多くてとても驚きました。でも実際はこんなものなのかと感じました。人の意識というのは、自分の興味の対象にしか向かないのは当然なんですけど、これだけ大がかりな事業なのに本当に関心が薄いんだと強く感じて、それがショックだったんですね。だから、何かもつと、この美術館ができたならそれこそ街が変わるとか、何か影響力のあるものを作りたいと思いましたね。そもそも一番最初に市長さんが「賑わいのある街にしたい」と仰ったんです。敷地はもともと金沢大学の附属小中学校があったところなんですけど、大学はすでに移転してしまっていて、それにくっついて小中学校も移転してしまっています。その跡地をどう使うかということ、長いあいだ議論していたらしいんですね。で、金沢21世紀美術館という名前ではなかったんですけど、広坂芸術街」という美術と芸術交流の2つの軸をメインにした施設をつくらうということから始まった

頭はまっさらに、与件に合わせて考えることが大切。



金沢21世紀美術館外観